

『思い出し薬』

みきを

敏子は思い出そうとした。

玄関脇の靴箱の扉を何度も開け閉めし、隅々まで確認しても、どうしてもみつからない。夏の暑さで汗が噴き出してくる。探し物を頼んだ張本人の夫の茂は気楽にテレビを見ている。敏子はだんだん腹が立ってきた。

「そうだ、一度あれを試してみよう」

先日スーパーの帰り道、小さな薬局で敏子はそれを見つけ、試しに買っていたのだった。箱を開けると、緑色の液体が入った小瓶が出てきた。《思い出し薬》

——効能 どうしても思い出せなくて困った時に服用すると、脳の海馬を活性化させ、過去の記憶を甦らせることができます——

敏子は半信半疑ながらも、「赤い登山靴」と唱え、その液体を一気に飲み干した。

「明日から、仲間と山へ行くことになった。あの赤い登山靴出しておいてくれ」

今朝、夫が唐突にそう言った。

「まあ、あなた、定年になってからテレビのお守ばかりで、山登りなんて大丈夫ですか」。私が驚いたように答えている。

まるで、映像の早戻しを見ているようだった。どんどん記憶が巻き戻されていく。

季節が戻り、分厚いセーターを着た私が、夫の赤い登山靴を処分しようか悩みながら、結局、新聞紙でくるんで、庭の物置へしまっている姿が見えた。

「あ、そうだ」。敏子は我に返った。急いで庭へ行き、物置を探してみると、新聞紙でくまられた赤い登山靴が出てきた。

「あなた、あったわ」

慌ててリビングへ戻る途中、敏子は、また氣を失った。さらに記憶がさかのぼっていく。

私はどんどん若くなっていった。

「あなたっ、山登りに行ったんじゃないかったの。どういうこと？ この登山靴、ぜんぜん汚れてないじゃない」

私が青筋立てて、夫を問い詰めている。

そうだ。二十年前、夫は山に行く嘘を吐いて、実は浮気をしていた……。

我に返った敏子は、無性に腹が立ってきた。夫は、気持ちよさそうにうたた寝をしている。

敏子は重い登山靴を握りしめ、そのぶ厚い靴底を、夫めがけて振りおろしたい衝動に駆られた。——とその時、再び氣を失った。

私は山にいた。その容姿は若さではつらつとしていた。大きな岩を登ろうとした瞬間、足を滑らせて落ちそうになった。

「危ないっ」。赤い登山靴をはいた青年が背後から、咄嗟に敏子を受け止めてくれた。

「あ、ありがとうございます」

私はびっくりして恥ずかしげに振り返り、思わず青年の顔をのぞき込んだ。

まだ若さの残る夫、茂が微笑んでいる。

気がつくと、敏子は赤い登山靴を抱きかかえたまま、ソファの横で座り込んでいた。

「おっ、見つけたか」

夫が起き上がって、敏子に手を差し出した。

「あの時、私はなぜ山にいたのかしら……」

敏子は再び氣を失った。

「すまない、敏子。僕は部長の娘との婚約を決めたんだ。君とはもう……」

「待って。行かないで、義男さん！」

私は追いつがろうと、手を伸ばした。

「おいっ敏子、どうした？」

その声で、敏子は氣がついた。

「あなた……」。敏子の腕をしっかりと握っているのは義男ではなく、夫の茂だった。

「あの時の山登りは、失恋旅行だった——そういうえば、義男さんの登山靴の色も……」

敏子は夫に内緒だった過去の秘め事を思い出し、ほんの少しうろたえた。

「この薬、本当によく効いたわ」

敏子は、そう思いながら箱の裏側を見た。

《ご注意／思い出したい期間によって、必ず薄めてお飲み下さい。でなければ余計なことまで思い出す危険性がございます》